

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2016.3.12-2016.6.11)

Contents

- P.1-3 復興に追い風を！リーダーの挑戦を加速させる文化を熊本に
- P.4 次の5年で、ETIC.が目指すこと
- P.5 今季のトピックス
- P.6 プロジェクトの進捗
- P.6 ご支援ご寄付のお願い

1 復興に追い風を！リーダーの挑戦を加速させる文化を熊本に



2016年4月に発災した熊本地震。震度7を2度経験し、余震も続く中、未だ不安を感じている方も少なくありません。そんな中でも、生活の復旧や地域・産業・福祉等の復興に向け、尽力している方が数多くいらっしゃいます。

そこで、ETIC.は前震から1週間となる4月21日、震災復興リーダー支援基金（熊本地震）を立ち上げ、現地の緊急支援活動をサポートするため、複数名を約4週間にわたり現地へ派遣。一般社団法人フミダスを運営事務局として、「熊本復興・右腕プログラム」を立ち上げることとなりました。

ETIC.では東日本大震災以降、復興を支えるべく各地でチャレンジするリーダーのもとに、その右腕となる人材を送る「右腕プログラム」を実施。現在までに38自治体、140プロジェクトに約240名を派遣してきました。この5年間の経験を踏まえても、今後時間の経過とともに、熊本でも被災者の生活サポートや仕事の再開に向けた動きを支援する人材、そのリーダーを支えるチームづくりが重要となっていきます。特に、高齢化が進んでいる熊本の内陸部においては、復興への歩みは中長期的なものになっていくことが予測されます。

そこで、ETIC.は前震から1週間となる4月21日、震災復興リーダー支援基金（熊本地震）を立ち上げ、現地の緊急支援活動をサポートするため、熊本出身のスタッフをはじめとし、複数名を約4週間にわたり現地へ派遣。10数年来、ともに地域の若手リーダー育成に取り組んできた仲間である一般社団法人フミダスを運営事務局として、「熊本復興・右腕プログラム」を立ち上げることとなりました。

※フミダスは2001年から熊本で実践型インターンシップを通じた人づくり、仕事づくりを開始。年間100件のインターンをマッチングしています。



2004年から開始した「チャレンジ・コミュニティ・プロジェクト」に参画する全国のコーディネーター団体がこの動きを後押しし、まずは緊急度の高い3つの案件から右腕人材の募集を開始。熊本に希望を生み出そうとしているリーダーたちを支え、その挑戦に追い風を送り続けていきたいと考えています。

●募集中の3つの右腕プロジェクト

1) 南阿蘇村観光PR事業実行委員会

熊本の主要産業といえば、農業と観光業です。熊本は全国有数の農業県。トマト、スイカ、ナスなど産出量日本一を誇る野菜や果実のほか、全国の98%を誇るい草等の工業農産物、1,000年以上の歴史を持つあか牛をはじめとした畜産、酪農はとて有名です。世界最大級のカルデラ周辺に広がる草原と、その持続的な活用を通じた循環型農業が評価され、阿蘇地域は2013年に世界農業遺産にも認定されています。

また、その阿蘇地域は年間約6千万人にのぼる熊本県への観光客数のうち、約6割が訪問しているように、農業と観光の求心力となっています。



ただ、今回の震災は作付の大切な時期に起こっただけではなく、人の流れ、モノの流れを大きく変えました。ゴールデンウィークを直撃し、観光客数は例年の1割。主要道路の分断により、熊本市からの所要時間、燃料費共に倍に。行き来するには標高1,000m超の迂回路を通らざるをえない状況に陥りました。

農業は人々の暮らし、地域の誇りの根幹でもあります。ただ、個々の農家の工夫や努力だけでは超えられない壁もあり、そのため、南阿蘇村役場／商工会／観光協会が連携し、地域をあげた販路開拓、資源発掘、ブランディング等、新しいチャレンジを推進していこうとしています。

土地の魅力、人の魅力、商品の魅力もあり、震災前は全国からこの地を訪れる観光客に頼る部分も多くありました。右腕はセールスマネージャーとして、この地域の持つポテンシャルの高さ、価値を活かし、改めてこの地域の魅力を発信。「地域ブランド」づくりにとどまらず、地域の農家や事業者たちのプラットフォームとして、必要な仕掛けを生み出すことができれば、地方創生のモデルの一つになることができるかもしれません。



2) 株式会社くまもと健康支援研究所

リーダーの松尾洋氏は「すべての人々に健康を」という目的で、地域を元気にするヘルスケアサービスを目指し学生時代に起業。介護予防、健康指導、コンサルティングサービスや、さらには各地のニーズやリソースを活かし、例えば高齢者が歩いた分だけ商店街で使える商品券がもらえる仕組み等、「健康×まちづくり×地域経済」の3つをつなぐ事業を行っています。

震災後すぐに複数の避難所にて、生活不活発病を予防すべく「くまカフェ」を立上げ、さまざまな専門職の方と連携し、運動や学童などの活動を通じて生活意欲の向上を目指しています。

復興に向け、まず大事なものは一人ひとりの気持ちと体。インフラの復旧、復興が進んでも、そこにいる人が元気にならなければ、本当の意味で地域が復興したことはありません。くまカフェの活動を通じ、毎日お花の水やりをし始めた高齢者もいますが、大きな余震があれば、すぐに元に戻ってしまう可能性もあり、息の長い伴走により安心と希望をもたらすことが重要です。

今後、徐々に人々が仮設住宅に移っていく中で、特に都市部では、コミュニティの脆弱性が危惧されます。人々の気持ちと体に寄り添うことで、コミュニティが自律するためのサポートに震災前から向き合ってきた「くま健」の強みを活かし、住民のニーズに即した事業を企画実施するコーディネーター人材を募集しています。

3) 株式会社南阿蘇ケアサービス

阿蘇で生まれ、生き、最期を迎えたいと思っているお年寄りが、安心して地域で暮らし続けられる。そんなビジョンを持って、人権に配慮した認知症ケアを先進地ドイツで学び、徹底的に地域密着の福祉の仕組み作りをチャレンジしてきたのが南阿蘇ケアサービスです。

相次ぐ余震の不安の中、一人で自宅にいる高齢者もいたため、福祉避難所として地域の要介護者を受入れてきました。一施設でできることは限られており、また、他の施設も同じように困っているだろうと、発災後数日で「みなみ阿蘇福祉救援ボランティアネットワーク」を立上げ、周辺9事業所に全国の介護・看護専門職をマッチング。更に、今後必要となる福祉仮設の準備も進めています。

「命を守る部分はネットワークでできても、次の段階をプロデュースできる人材が必要」と、副センター長の松尾さん。短期的にはインフラの復旧までの期間をどう乗り越えるか。中長期的にはこの地域の福祉の在り方をいかに強いものにできるか。今後、どのようなニーズが発生するか先回りして考え、新しい地域福祉のプロデュースに力を貸して下さる方を募集中です。

東日本大震災以降の東北でも、復興の現場で、創造的なチャレンジが数多く行われました。復興の現場は創造性とチャレンジの現場でもあり、そのような困難な場こそ、人が育つ場でもあります。

熊本は広範囲の津波被害を受けた東北に比べると、再開のスピードが速いと言えるでしょう。被災直後は、1週間、水が出ない、電気が使えない、食料が手に入らない状況が続いたものの、インフラは1ヶ月で9割以上が復旧。それもあって、緊急支援は3ヶ月程度で少なくなっていく可能性が高いと言われています。

とはいえ、この2ヶ月半で、昨年日本全国で起こった地震の数を超えるほどの余震がありました。雨の多い土地柄ということもあり、追災害も懸念されます。

そんな中でも熊本の方々には、「自分たちの力で何とかしてやろう」という気持ちがあります。だからこそ、『支援ではなく、挑戦する人たちに後押しが欲しい』とフミダスの代表理事である濱本伸司さんは語ります。

ETIC.では今後も、「熊本復興・右腕プログラム」を通じて、熊本の復興に向かうリーダーと想いを持った人材をつなぐコーディネーターを募集していきます。また、この動きを支えるべく、引き続き「震災復興リーダー支援基金（熊本地震）」へのご協力もお待ちしております。



◆がまだせ!くまもと!復興を支える求人特集
<http://drive.media/career/dc-feature/feature/11244>

◆「震災復興リーダー支援基金・熊本地震」へのご協力をお願い
<http://michinokushigoto.jp/info/9832>

2 次の5年で、ETICが目指すこと



震災から5年、新規創業・新規事業を支えてきた右腕プログラムは、次のフェーズに入ります。新たなローカルベンチャー（地域資源を活かし、価値を生む取り組み）の担い手を増やすこと、そしてローカルベンチャーのモデルを生み出し、東北で挑戦が生まれ続けるエコシステムをつくることに、これからの5年、取り組みます。さらに、ご一緒に歩んでいただける企業・自治体・NPOの皆さまとの連携を強化していきます。

1. 「右腕プログラム」の改革

これまでの右腕派遣後の起業率は約10%。これを3倍である30%に引き上げていくことを目標に、地域での起業を志望する若者たちを発掘し、東北で始まっているスタートアップの現場へとつなげていきます。そして、事業アイデアを磨くためのトレーニング、地域の資源との接続など、起業に向けたステップを一気通貫でサポートするプログラムへと改革を進めます。

また、これまで特定の事業者からの相談に応じて進めてきた右腕プログラムを、自治体はじめ地域のハブ団体とのパートナーシップにより進めていきます。地域として強化していきたい産業領域や地域課題に対して、その担い手を戦略的に増やしていきます。現在、apbank、ヤフー、リボンアートフェスティバルとの連携による石巻市での展開が決まっている他、他の市町村との連携に向けた協議を進めています。

まずは東北を中心に10の自治体とのパートナーシップを目指し、その後全国の市町村にも広がっていきます。

2. 挑戦が生まれるエコシステムの形成

「挑戦が生まれるエコシステム」が育つ上で、各地域や、ヘルスケア・水産業・観光といった各テーマにおける「ハブ機能」の役割がますます重要になっています。年間100名近い先輩経営者たちによるメンタリングの場を作ってきたETICのノウハウやネットワークを駆使し、東北から始まっている先駆的なハブ機能のモデル作りを加速させていきます。



また、大企業や自治体、高等教育機関などの参画を加速し、協働による課題解決や価値共創を推進していくための場づくり、つまりコレクティブ・インパクト（※）の促進に貢献します。

※立場の異なる組織が、強みを活かし合いながら社会的課題の解決を目指すアプローチ。

3. ローカルベンチャーの機運の醸成

東北の新しい地域経済・社会づくりの現場への2泊3日のフィールドワークを中心に、地域に関わる人たちのコミュニティづくりを進めている「東北オープンアカデミー」。地域でのチャレンジの裾野を広げるこの動きを広げていくために、「オール東北」の体制で盛り上げていきます。

また、林業を中心としたローカルベンチャーを多数輩出している岡山県西粟倉村をはじめ、全国の先進地域と連携し、地域での起業という選択肢を広く発信していきます。引き続き、右腕プログラムへのご支援、ご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

3 今季のトピックス（2016.3.12-2016.6.11）

■ハブ団体合同合宿@檜葉町(6月9～10日)

6月9～10日に、ハブ機能強化事業に採択されている6団体の合同合宿を福島県檜葉町で開催しました。今回で第5回目となる合同合宿は、原発避難エリアの双葉郡を拠点に活動する葛力創造舎がホストとなり、約30名の参加者で開催。外部メンターとして面白法人カヤックの西田氏、中越防災安全推進機構の稲垣氏、株式会社御祓川の森山氏に参画いただきました。

冒頭には富岡町役場の佐々木氏による復興状況の解説から始まり、続いて、各団体ごとの事業進捗や今後の事業戦略を、メンターを交えて磨きました。夕食後は「2年間が終了した今、各地で生まれている成果をどう可視化、モデル化していくか」「何を大切に事業を継続していくか」といった、情報発信の方法や全体のビジョンについて全員で議論を深めました。

また、2日目には双葉郡未来会議の平山氏のガイドによる、福島第一原発周辺地域の視察を行い、改めて福島特有の復興の困難さを認識するとともに、その中でも懸命に取り組む人々の取組の軌跡を目の当たりにする機会となりました。



■ジョンソン・エンド・ジョンソン×ETIC.右腕プログラム合宿@仙台(5月26～27日)



5月26～27日の2日間にわたり、「ジョンソン・エンド・ジョンソン×ETIC.右腕プログラム」の右腕派遣先の6団体を対象に、事業をブラッシュアップするための合宿を開催しました。

同プログラムでは、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社の支援を受け、「被災地の方々の「健康」に寄与する事業の創出・拡大」をテーマに、東北の仕事づくりを牽引する6事業に右腕人材を派遣しています。

合宿では、メンターとしてケアセンターやわらぎの石川治江氏、入川スタイル&HDの入川秀人氏、いわてNPO-NETサポートの菊池広人氏をお招きし、各団体の事業内容や進捗状況について活発な議論が展開。メンターのフィードバックを踏まえ、最後に各団体が改めて自分達の事業内容や、今後の計画をプレゼンテーションしました。

参加した団体からは、「メンターのフィードバックから、これまで気づいていなかった課題が明確になった」「今回の合宿が、事業の本質を言語化するきっかけになると思う」などの感想がありました。

■右腕合宿@陸前高田市(4月16～17日)



4月16日(土)～17日(日)の2日間にわたり、現在活動中の右腕を対象とした研修「右腕合宿」を開催。今回は岩手県陸前高田市にある右腕受け入れ先「箱根山テラス」を会場に、活動開始前右腕2名、活動中右腕11名、OB 7名(計20名)が参加しました。

新しい右腕が増えて来た時期だったこともあり、お互いを深く知り、学び合うネットワークを築くことを狙いにした今回の合宿。「右腕同士どこでどのような活動をしているのか」「どんな思いを大切にしながら活動しているのか」など、参加者同士の会話を中心としたプログラムで構成をしました。

「色々な人と話ができ、仲間ができる有意義な研修だった」「他の参加者との対話を通じて、自分が置かれている環境や、自分自身について整理できた」という参加者からの感想が挙がり、今後に繋がる関係性や気づきを得た機会になったようです。

参加者アンケートの満足度調査でも、全員から「他の右腕に参加を薦めたい」と回答を頂きました。

次回の右腕合宿は2016年9月3・4日。宮城県石巻市雄勝町にある右腕受け入れ先「モリウミアス」での開催を予定しています。

4 プロジェクトの進捗

2016年3月11日の時点で、140のプロジェクトに238名の右腕人材が参画してまいりました。参画期間（1年間）が終了した右腕人材（社会人に限定）の約60%が継続して被災地に残り、そのうち21名は自ら起業するなど、彼らは被災地での重要な役割を担いつつあります。現役（参画期間中）の右腕とあわせると、現在141名の人材が、東北の担い手として活動を行っています。

2013年に新たに設定した、「5年で300名」の参画に向け、今後も精度の高いマッチングと各種サポートを行っています。



5 ご支援・ご寄付のお願い

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付・助成金等の総額は、916,109,608円という多額のご支援をいただいております。この場をお借りしまして、改めて心より感謝申し上げます。本プロジェクトは、当初、2013年度末までの3年間を目安に取り組んでおりました。しかし、東北の復興が本格化していく中で、中核事業である右腕プログラムへのニーズは、更に高まってきており、2015年度末までの中長期計画を策定し、取り組んで参りました。

右腕プログラムは、2016年度より新たな5カ年計画を設定し、今後の東北の復興、さらには新たな地域創生に向けた取り組みへと進化を目指していきます。皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくごお願い申し上げます。

>>寄付ページURL http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/donations_support

《ご寄付の受付》

■ Global Giving

<http://www.globalgiving.org/projects/sponsor-fellows-for-tohoku-and-japans-recovery/>

※米国在住の方は、GlobalGivingから寄付していただくと、税控除を受けることができます。

■ American Express (メンバーシップ・リワード)

http://catalogue.membershiprewards.jp/viewAwardDetail.mtw?productId=4487681&categoryName=jp_21a_charity_tohoku

※アメリカン・エクスプレスのカード会員さまは、ポイントによる寄附ができます。

連絡先・お問い合わせ先

◆NPO法人ETIC内 震災復興リーダー支援プロジェクト事務局（担当：山内・押切）

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail : fukkou@etic.or.jp Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>